長崎大学教育学部人文科学研究報告　第52号　63～71（1996）

悲劇のパランプセスト：『青い眼が欲しい』（1970）の語り手クローディアをめぐって

中　谷　ひとみ

Palimpsest of an American Black Tragedy: Claudia in Toni Morrison's *The Bluest Eye* (1970)

Hitomi NAKATANI

多くの黒人が述懐するように，ヨーロッパの父権制社会が黒人に与えたのは言葉であり音楽ではなかった。したがってアフリカ系アメリカ人もヨーロッパが起源である所与のロゴスの言語とアングロサクソン白人の価値観の呪縛から解放されて，黒人としてのアイデンティティ確立と自身の「声」とを模索しなければならないことになる。少女時代に目撃した友人 Pecola の悲劇を回想し彼女に対する鎮魂の言葉を模索する，Toni Morrison の処女作『青い眼が欲しい』の Claudia も例外ではない。

モリソンが述べているように，もともとこの小説はピコーラと彼女の家族の悲劇の一部始終を描いたものだったが，作者は「繊細で傷つきやすい人物についての探究に重点を置いた結果，その重みが［ピコーラ］を打ち砕き，打ち砕いたことに対して自分を省みることをせずに，彼女を憐れんでおしまいという気楽な解決の方へ読者を導いて行きはしないか」と考え「読者が再構成しなければならないいくつかの部分に分け」た。こうしてこの小説は読者自身が真実を構築して小説中の人物と事件に深くかかわるように秋，冬，春，夏と前書きや後書きに相当する部分に分けられたが，モリソン自身は「多くの読者は心に触れるものを感じはしたものの，感動はしなかった」[1]ので，効果的ではなかったと考えている。いずれにせよ，「ピコーラの奇妙な人生と読者の橋渡し役として［登場人物や題材が］身近に感じられるように，彼女と同等な友人の一人称の視点が採用された。こうして語り手の私・クローディアはコーラスの役割を果たせる。また読者は［事件の異様さがもたらす］恐怖を包み隠すことができるし，真実が語れていなくても幼い少女の視点のせいにできる。」[2]ところが，語り手クローディアを介在させることにより，『青い眼が欲しい』は彼女が語るピコーラの物語というよりは，語り手クローディアの物語となった。[3]ピコーラの物語はクローディアが彼女の『真実』に到達するためのきっかけにすぎない。個別的な黒人としてのピコーラと彼女の一家の悲劇のパランプセストの上に，アイデンティティと自身の「声」を確立しようとする語り手の物語が書かれたのだ。本論の目的は，この上にかかれた物語を明らかにすることにある。

確かに『青い眼が欲しい』は一見さまざまな声で語られているように見える。「社会学者や心理学者のような冷静さで登場人物を観察し彼らの行動を解説する洗練された語り手の

声；幼少時や夫への愛とその喪失を回想する Pauline Breedlove のディスコース；ピコーラの強姦についての反芻と狂気の幻想を語る［意識の流れ］の声；ピコーラに会い，黒人コミュニティが彼女を破滅させるのを目撃した幼い頃を回想する，大人になったクローディアの改悛の声」[4]である。しかし語りの声は分裂してはいない。一見不可解な全知性を付与されているように見える語り手クローディアは，9歳の時に見聞きした自分の父親によって強姦され，妊娠し，死産するという友人の忌まわしい悲劇を，事件にかかわった人物達から聞いた話や自身の想像や論理的思考を基に，後年になって再構築している。なぜこのような悲劇が起こってしまったのかについての合理的な因果関係の説明が困難なことがら［真実］と，黒人である／になるということはどういうことかを語ることが，この小説のテーマなのだ。語り手であり「道徳の記録者」[5]であるクローディアは，小説中一貫して普遍的な人間性の真実を深く求め続け，見聞きした自らの経験を自分の言葉で語り，友人の悲劇のみならず自らと黒人コミュニティの欺瞞を看破している。幼い頃より他の子供とは異なる感受性の持ち主であった彼女は，自分自身の言葉を模索し，彼女の真実に到達できた。本論ではクローディアが何の呪縛から解放され，黒人としてのアイデンティティと自身の声／言葉を得て真実に到達できたか，そしてそのためには何が必要であったかを検討していく。そうすれば必然的に，彼女の一人称語りの意義や，彼女のディスコースがモリソンの意図をどこまで効果的に実現できたかが浮き彫りになってくるはずである。

呪縛と解放

事件が起きた時10歳であった姉 Frieda や11歳のピコーラと同様に，9歳であったクローディアも小学校の教科書に描かれている家庭を規範あるいは理想像として刷り込まれていた。子供達 Dick と Jane，頼りがいのある父親，優しい母親，ペットの猫と犬から構成され，郊外に住むと思われる典型的な白人中流家庭の幸福模様である。同時にこの黒人少女達は自分たちの劣等観を植えつけられ，自分達が醜いことを信じ込まされた。たとえ成績や人間性が優れていても，白人のみならず混血の黒人にさえも劣り，人間としての価値が低いと思わされてきた結果，彼女達は白人達の価値観を体現する金髪でかわいい美少女 Shirley Temple の呪縛にからめ捕られることになる。白い肌と青い眼さえあれば人に愛され，幸福が訪れるという強迫観念に封じ込められた彼女達は，自分自身の美点に対して盲目であり，自分を愛せない。

黒人にとってもうひとつの呪縛は白人によって押しつけられた所与の言語である。彼ら自身の声／言葉／音楽は抑圧された。モリソンの *Beloved* (1987) では，奴隷であった黒人登場人物達は自分の名前ですら自分自身のものではない。所有者の白人により Paul A Garner, Paul D Garner, Paul F Garner というように，差異は示すが個性を無視した名前を与えられた。『青い眼が欲しい』のクローディアは幼い頃より，白人の価値観やそれに染まった黒人の大人の価値観を受け入れず，自分自身の気持ちを大切にし，それを表現する声を探している。とはいっても，黒人の大人にとっても自分の感情を表現する言葉は白人の言葉ではない。ピコーラの母ポーリーンは初めて Cholly Breedlove を見た時のことを，故郷で体験した「切れ切れの色がみんな集まったような気がした」と語っている。彼女自身の言葉は白人のロゴスの言語ではなく感覚的に表現される言葉なのだ。彼女はチョリーに自分の悪い足を優しく触れられて恋に落ちていくが，その時のことを「ちょうどあのこ

けももとレモネードと螢が描いた緑の筋がみんな一緒にやって来たみたいだった」(365-66) と回想している。また彼女は夫との愛の行為の絶頂を，所与の言語ではなく虹の色彩で表現している。

> あの小さな色の断片がからだの中を漂い上がって来るのを感じ始める——からだの奥底で。こふきこがねの光が描く緑色の筋，腿を滴り落ちたこけももの紫色，母さんのレモネードの黄色が，からだの中を優しく流れる。それから私は自分が両脚の間で笑っているような感じがする。その笑いがみんな色とごちゃごちゃに混ざりあい，絶頂に達すると思い，また達しないのではないかと思い，こわくなる。……そして達すると，からだの中がみんな虹になってしまう。(376)

もともと語り得ぬものを語ることはロゴスの言葉でも困難であるが，黒人にとってその押しつけられて自分のものではない白人の言葉では，二重に困難であるのだ。

『青い眼が欲しい』に登場する少女達は，このようなシャーリー・テンプルと白人の言葉の呪縛から解放されなければ，黒人としてのアイデンティティと個を表現する（個が主張される）自分自身の言葉を得ることはできない。ところでモリソンの場合黒人とは言っても均一の人種や民族の総体としての存在を示すわけではなく，個別的な存在であることは注意しなければならない。彼女の世界観は黒人の等質性というよりも「個人の順応性や文化認識に基づくもので，その二つの基本的価値は生き残りと差異，つまり差異の中で生き残ることである。」[6]したがって彼女の関心がさまざまな黒人登場人物の中でも特に二人の少女の生き残りにあることは明らかであろう。内なる真の眼でシャーリー・テンプル願望の真実を看破できなかったピコーラとは異なり，クローディアは真実に到達でき，生き残れた。シャーリー・テンプルを好きになれるほど心理的に成長していなかった9歳のクローディアは，ずっと後になってから「素朴なサディズムがまやかしの憎悪や欺瞞的な愛になることが，シャーリー・テンプルへの小さな一歩である」(307) ことを知り，成長してシャーリーを好きになった。大人になった今では，自分達が本当に強くはなく攻撃的であることで弱さを隠匿していること，真に自由ではなくただ許されているだけであること，外見だけ取り繕っていて内実のないこと，一見斬新で革新的な考えをひけらかしながら実は古くさい考えを踏襲しているだけであるという，自分たちのさまざまな欺瞞に気付くことができている。さらに無関心の暴力のおぞましさ，それをまやかしの憎悪やごまかしの愛に転換していること，変化とは向上を伴わない順応なのだということを，クローディアは知っている。また真に恐るべきは，シャーリー・テンプルや，自分たちほど肌の色が黒くなくて白人と同じほど裕福な家庭に育った Maureen Peal の黄金色の髪や澄んだ青い眼自体ではなく，彼女達を美しく見せているが自分達をそうしていない，もっと本質的なものであること，そして黒人コミュニティの中の自分達がピコーラを利用しつくし，破滅させたのだと気付く。すべてが遅すぎてしまった今，クローディアは述懐している。

> こうして歳月はハンカチのように折り重なっていった。……［母親といっしょに引っ越した町はずれの小さな茶褐色の家にいるピコーラには］時がたつにつれて小鳥のような身ぶりは磨り減って，タイヤの輪とひまわりの間，コカコーラの瓶とトウワタとの間，世界中のごみと美しさの間——ごみと美しさこそ彼女の自身の姿だった——を歩きながら，ただ何かを拾ったりむしったりするような動作に変わった。……私達は皆——彼女を知っていたすべての人々は——彼女の上で

> 身体を洗った後，とても健康になった気がしたものだ。私達は彼女の醜さの上にまたがった時，ひどく美しくなった。彼女の素朴さが私達を飾りたて，彼女の罪が私達を神聖にし，彼女の苦痛が私達を健康で輝かせ，彼女の不器用さのおかげで私達は自分にユーモア感覚があると思ったものだ。彼女の口下手が私達を雄弁だと思いこませ，彼女の貧しさが私達を気前良くさせた。彼女の白昼夢さえ私達は利用した——自分の悪夢を鎮めるために。彼女はこういうことを私達に許してくれたので，私達の軽蔑を受けるにふさわしいものとなった。私達は彼女を犠牲にして自分達の自我をみがきあげ，彼女の弱さで自分達の性格に詰め物をし，自分達は強いという幻想を抱いて，あくびした。(424)

白人のみならず黒人のコミュニティにあっても，より弱い者を利用して自らを欺いているという人間の悪しき真実に，クローディアは到達できた。自分の言葉で個と社会の真実を語ることができた語り手は，無知や無垢から解放され，白人や他の黒人とは異なる自分のアイデンティティを見つけた。そして白人の言葉を息の通った自分自身の言葉とすることで，押しつけられた言語の枷から解き放たれたのだ。

他の登場人物は白人をよしとする価値観の呪縛から解放され，黒人としてのアイデンティティを確立できたのだろうか。内なる目で物事の本質を見れず，眼が青く変わるという奇跡だけが自分を救い，幸せにしてくれると確信していたので自分の美しさを知ろうともせず，愛らしさに気付きもしなかったピコーラは，絶えず視線ばかりを気にしている。キャンディーを買いに行った白人店主の視線を気にして彼を直視できないのみならず，まともに話ができない。アイデンティティ形成に必要な精神的支えと愛情を両親から得られないのみならず，家庭にあってさえも不合理な暴力をふるう家長のチョリーの視線を気にし，おどおどしている。外面的に視線を意識することが真のコミュニケーションを阻む。真実にも到達できない。その結果ピコーラは，青くはない自分の眼から手痛いしっぺ返しを食らうことになる。争う両親を見ていたたまれず，自分を消してくださいと神に祈っても，眼だけは消えない。Soaphead Church の奸計というよりは，彼の自分の無力さに対する絶望と神に対するやり場のない怒りと彼女に対する慈愛から，彼女は最後には念願の青い眼を獲得するが，正気を失い分裂した自我の中で生き続けることになる。Mary Jane のキャンディーを食べることは眼を食べること，メアリー・ジェーンを食べることであり，従って自分がメアリー・ジェーンになり，眼も彼女の目になることだと考えていたピコーラはメアリー・ジェーンのキャンディーに食べられてしまい，今は青い眼と青くない眼の対立を自分自身の中に抱え込んだまま閉塞状態に陥っている。一見青い眼の呪縛から逃避したように見えるが，皮肉にも青くはない自分の眼の呪縛から永遠に抜けられないのだ。黒人で眼は青くない，自分自身のアイデンティティに復讐された。

ポーリーンはピコーラの出産に際して，病院の医者達が白人の産婦とは異なり，黒人の産婦に対しては顔を見ようともしないこと，つまり黒人が白人から個として認められないことに憤慨をおぼえている。ピコーラと同様に他人の視線を意識し，黒人コミュニティの中で認められて，特に他の女達から好意的な視線を投げかけられることを切望した。そして母は娘に，彼女を死に至らせてしまうことになる誤った価値観を植え付けてしまう。妊娠していた時，映画を見てそのロマンチックなファンタシーの愛の世界がリアリティーであると信じ，そのまやかしの世界を精神の目的地であると考えるようになる。人間の価値

を美醜に置き，その結果，独断的にも人を美の絶対的尺度の範疇に当てはめて評価する。映画のロマンスで滋養を得た偽りのリアリティの中で，自分のまやかしのアイデンティティを実現しようとする。children［チルドレン］を chil'ren［チルレン］と言うような彼女の言葉使いを馬鹿にし，自分を軽蔑してきた女達より一層道徳的になり，信用を得ようと躍起になる。チルレンの発音を後に矯正したことでもわかるように，白人の言葉の規範にはずれる自分の個人語的な発音を抑圧し，黒人そして個としてのアイデンティティを自ら抹殺した。彼女の探究のベクトルは内的真実を求めて内に向かうのではなく，外の虚飾の世界にのみ向かった。夫を罪悪と失敗の見本として掲げ，彼から子供達を守ろうとするけなげな母親の役割を演じ，子供達を品行方正に鍛え上げることだけを使命と考え，そんな自分を良い母親だと信じた。そして不器用，父に似ること，神に愛されないこと，チョリーの母の狂気の遺伝子を受け継いでいることに対する恐怖心のみを子供達に植えつけた。生まれたばかりの自分の娘を肌が醜いために嫌悪したような母に愛は不在で，母子の精神的な距離は拡大する一方となり，母は子供と家庭を顧みなくなる。子供には自分のことを Mrs. Breedlove と他人行儀に呼ばせるが，「権力，賞賛，贅沢を可能にし，これまで一度ももらったことのないもの――ポリーという愛称――すら与えてくれた」(374) 白人雇い主には感謝し，家政婦として献身した。自分の家庭生活より白人との生活に意義と満足を見出した。自分のものではない名前を自分のものだと錯覚し，その名前に所有され，結果としていっそう深く白人の価値観にからめ捕られたのである。

ポーリーンがそもそも日常生活と遊離せず，まやかしにせよ自我と正気を見失わないでやくざな亭主をしょいこんだ高潔で信仰心厚いキリスト教徒の役回りを演じるためにチョリーを必要としたのと同様に，チョリーもポーリーンを必要とした。彼は彼女を憎み，肉体的にも精神的にも彼女を苛むことで自分を無垢のままに保った。彼らは互いを搾取するだけの関係だったのである。ブリードラブ家のチョリー以外の人々の醜さは自分の責任ではなく，自分を愛せないことに由来する醜さであったが，家に放火し家族を「家なし」にしてしまうような最悪の家長であったチョリーの醜さは彼自身の行為――絶望や放蕩や弱者に向けた暴力――の結果の醜さであり，彼自身の責任であった。しかし娘を強姦した時の彼の心理はそれほど単純ではない。その真実に達することが語り手クローディアの目的であるが，彼女はその時の一部始終を分析して彼女自身の言葉でこう語っている。流しで皿を洗うピコーラの顔つきが不幸で鞭打たれたように見え，チョリーは自分の罪悪感や無力感から言い知れぬ怒りを覚える。初めてポーリーンを見た時と同じしぐさをピコーラがするので，優しく守ってやりたい，掻いている足を手で覆い，自分の歯で彼女のふくらはぎのかゆみをそっとかじり取ってやりたいという気がする。ポーリーンの思い出と禁じられた行為を行っているという意識が混然としながら，興奮した彼は性的欲望のなすがまま娘を犯す。行為が終わった後，彼の中には憎しみと優しさの相反する気持ちが残る。娘への愛情と，惨めな生活を家族におくらせていることに対する自責の念と，社会への言いようのない怒りなどの複雑な感情が根底にあったのだ。これは生後 4 日にして母に見捨てられ，母の愛を知らず自分の愛するものに対しては愛を表現する彼の「言葉」を持たなかったチョリーであってみれば無理もないことであった。

一歳年上である姉フリーダは子供の頃，シャーリー・テンプルを憎んだクローディアとは異なりシャーリーを愛せるほど「大人」であり，ピコーラとは違いその青い眼に強迫観

念を持つほど危険な状態でもなかった。とはいっても，下宿人に胸をさわられて両親が彼を追い出した時，妹と同様に売春婦の China と Poland はウイスキーを飲むから「傷物」じゃないと考え，自分が傷物にならないためにピコーラの家へいっしょにウイスキーをもらいに行くほど，やはり幼い少女として描かれている。フリーダはクローディアとピコーラのそれぞれの欲望とその探究の顚末とは対照的に無垢でとどまっているから，象徴として彼女を考える時，置き去りにされた無垢あるいは成長の一時停止を意味しているといえよう。病気のクローディアを愛情深く見守り看病する，クローディアの母 Mrs. McTeer は愛と癒しを体現しているが，幼いクローディアたちにわかるようにはそれを表現できなかった。チョリーとは異なり，父親の Mr. McTeer は彼なりの愛情を表現する言葉を多少は持っていたが，妻と同様に十分であるとは言えない。興味深いのは，ブリードラブ家の息子 Sammy であろう。何度も家出を繰り返したが真に自分が帰属する場所と自己実現の場を見つけられなかった彼は，自分を表現する「言葉」を持たなかった，最も良い例であろう。このように『青い眼が欲しい』のマイナーな登場人物達は，無垢あるいは声を持たない状態から自分を表現する声を得て成長する段階を示すというこの小説のテーマに寄与している。自分自身の言葉を獲得し真実に到達できたクローディアとは対照的なのだ。

音楽家の言葉を得るために

語り手クローディアは，生後4日で母に捨てられて大伯母に育てられたため正常な親子関係を結ぶ術も知らず自分の愛情を表現する言葉も持たないチョリーが，何故彼自身の娘を強姦したか，そしてなぜピコーラの一家が悲惨な人生を送らなければならなかったかについて，事実関係を把握し自分の言葉で語ることができたが，その言葉とはどんなものだろうか。そしてその言葉を得るためには何が必要であったのか。肉親の愛にも裏切られ，抑圧され続け，近親相姦を犯した黒人の真実には，白人から押しつけられて自分のものではない言葉では到達できない。初めにクローディアは，なぜ惨劇が起こったか[why]を語るのは困難であるから，事態がどういうふうに進展していったか[how]を記述すると言って語り始めている。この言葉が示唆しているように，ロゴスに基盤を置く白人の言葉を使い合理的な解釈をしようとするだけでは，語ることが困難なことがら［真実］に到達できないことを彼女は知っている。そして「チョリーの生涯の切れ切れの断片は音楽家の頭の中でだけ首尾一貫したものとなれる：鍵盤や張った皮，木製共鳴箱にこだまする弦に触れることで語りたいことを語る人のみが彼の生涯に真実の形を与えることができる」(395)ことを彼女は知るのである。真実を語れる言葉とは所与の言語ではなく，音楽家の普遍的な言葉であるのだ。彼女に押しつけられた言葉が抑圧してきたそれ自身の内的部分――音楽――を回復すれば，自身の声が得られるのだ。それでは彼女が真実を語る言葉を得られたのはなぜだろうか。

クローディアの未熟さや無垢は，かわいいからではなく大好きな Bojangles と踊ったのでシャーリー・テンプルが大嫌いだったことや，ピコーラと生まれてくる赤ん坊のために自転車を買うのをあきらめてマリーゴールドの種を植えたにもかかわらずそれが根付かなかった理由を，自分達の祈りが足りなかったせいだと考えて，姉と互いに責め合ったことでもうかがえる。しかしクローディアには，フリーダやピコーラとは著しく異なる点があった。感覚的に敏感であり，特異な感受性の持ち主であったのだ。そしてブリードラブ家

の悲劇を語ろうとする意志と同様に彼女だけが持っていたのが，物事の本質を知ろうとする意志である。クローディアは子供の頃大きな青い眼のベビードールに汚れ無き憎しみを覚え，アン人形には反発し，怯えてさえいた。絵本から人形をどう扱い大人の期待を満たせばいいかを知り，大人の前では人形をかわいがる素振りを見せはするが，人形の感触も姿形も自分に敵対しているように思える。反発してはいるが，いやそうだからこそ，彼女は白人の少女のかわいさの秘密を見つけたい。世界中の人がかわいいと思うものの正体を見届けたい。そこで，その価値観が色濃く反映され，少女達に渇望され愛される人形の魅力の本質を見出そうとして，人形をばらばらにしてその機械仕掛けの空虚な内実を知る。さらに，世界中のすべてのシャーリー・テンプルに対する憎しみよりもっと奇妙で恐ろしいものを感じた語り手は，人形の手足をばらばらにするように白人の女の子をばらばらにしたいという衝動にも駆られる。感受性が強く，普遍的な人間の感情や欲望を解剖するのにふさわしい心理学者のような感性の持ち主であったのだ。

クローディアのもうひとつの特徴は，子供の頃自分の欲望を自分自身の言葉で的確に表現することはできないが，白人の価値観を体現するような「物」を与えられるよりは，感覚的な満足を得たいと思ったことである。大人達はクリスマスのプレゼントに女の子への贈り物としてはステレオタイプである人形を買い与えたが，彼女はプレゼントに何が欲しいか聞いてくれれば「物をもらうより何かを感じたかった——ひざの上にライラックをいっぱいのせておばあちゃんの台所の低いスツールに腰かけ，おじいちゃんのバイオリンを聞き，その後桃のおいしさを味わいたい——と答えただろうに」(307) と，過去を振り返って述べている。また前述のように，人形の感触が自分と敵対しているように感じるためいっそう人形を嫌いになる。感覚を介して得られる心地良さや満足を望む傾向は，彼女の言語理解にも反映している。意味作用として言葉をとらえられない幼い頃，下宿人となる Mr. Henry について大人たちが噂話をしているのを聞いた時，理解できない大人の言葉を「少し意地悪なダンスみたいだ。音が音に出会い，お辞儀をし，シミーを踊って退場するみたいだ」(302) と語っているように，もともと感覚的に鋭く，物事を感覚を通して知覚する傾向があった。言葉の意味はわからなくても，大人たちの感情の鋭さやためらい，突き入り方は感覚的に理解できるし，大人の顔や手や足を眺めて彼等の声音に潜む真実を聞き取ろうと耳をすます。Meridian の音の響きに酔うように，言語を恣意的な意味作用としてよりも感覚的にとらえている。言葉が彼女の身体の深みにまで達しているのだ。この点では学校の勉強の中で数は好きだが言葉に幻滅したポーリーンと同じと考えられよう。ただしポーリーンが真実に到達できなかった理由は前述したとおりである。

クローディアがブリードラブ一家の物語を語る前に『青い眼が欲しい』のテクストが奇妙なディスコースになっているのは，彼女の感覚的認識と語りの手法を考えると象徴的である。出し抜けに小学校の教科書に出てくる，郊外に住み中流の生活水準と思しき幸せそうな家庭像が，三様に語られる。規範的なディスコース，句読点のないディスコース，文としてのタイポグラフィカルな体裁が崩されて句読点も文字の間隔もないディスコースの順である。文字はだんだん小さくなる。ディックとジェーンの幸せ家族のテクストは次第に，所与の言語の規範を無視した判読し難いディスコースとなっていく。これは教科書の理想的家庭像の崩壊を，実験的に活字で示していると言えよう。語り手が教科書の家庭像を言語的ではなく視覚的にとらえていたことで，刷り込まれたイメージが瓦解していく過

程を表すことが容易になるのだ。映画のフェイドインやフェイドアウトのような手法を言語によって実践しているといえよう。語りと言語の視覚革命。クローディアの語りの方法は，幸せ家族の崩壊した断片から互いに脈絡の乏しい記憶の断片をたぐりよせ，ブリードラブ家の人々自身が語ったことや彼女が実際に見聞きしたことを感覚的に回想して，家族と悲劇の全体像にふくらませていくものだが，同時に彼女の推理力という論理・合理的な能力も発揮させながら語っている。このように『青い眼が欲しい』の語りの構築は視覚・感覚的かつ合理的・理性的である。幸せ家族の断片は小説全体を通して，皮肉にもサブリミナル効果のように，ブリードラブ家の不幸物語の収束へ語り手と読者を向かわせることに貢献している。また映画的手法の他にクローディアの語りに特徴的なのは，口承文学の語り口を採用していることである。気のおけない仲間同士でゴシップを語るような印象を与える「秘密にしていたけれど……」で始まる彼女の語りは，理性や内省のスクリーンを通さない生のままの語りの自発性と身近さ／通俗性を示すが，これにより真実との肉薄が可能になるのだ。白人の言語を懐疑し，自らの感覚で物事を認識し，自らの言葉で物語を語ろうとするクローディアの意志が，そして手法的には映画的あるいは伝承的語りのディスコースに見られるような彼女の感覚的認識が，彼女に黒人のアイデンティティと自分自身の言葉に到達させたのだ。

真実というものは事態を客観視できて初めて到達できる。それには語り手の語ろうとする意志などの内的条件のみならず，外的には時間を経ることにより饒舌なまでの記憶がそぎ落とされて記憶が浄化されることも必要である。無垢と精神的未熟さと人間や世界に関する知識の欠如から成長していく過程がわかるように，大人になった語り手が少女時代を回想する必要があるのだ。その結果，9歳だった当時は祈っておまじないを唱えればすべてうまくいくとナイーブに考えていた語り手は，1941年の秋にマリーゴールドが咲かなかったわけは祈りが足りなかったせいではなく土地が不毛だったからであり，どこの家のマリーゴールドも咲かなかったことがわかる。怒ったように病気の自分を叱責しながら看病していた母の深い愛情が今では理解でき「記憶に残っているほど本当に辛かったのだろうか，愛情豊かで実のある辛さだったのかもしれない」(300) と思う。自分を死なせたくないと思い必死に看病する母の手のぬくもりを今でははっきり感じられる。時間と記憶は癒しとアイデンティティ到達に通じるのだ。

秋にクローディアは病気で苦しみ，シャーリー・テンプルを憎み，人形を嫌悪した。一方ピコーラは喧嘩の絶えない両親を見ながら，どちらかが相手を殺してくれたらいいのにという抑えがたい願望と，自分の方こそ死んでしまいたいという心からの願いの板ばさみに苦しみ，父によって一家は「家なし」にされた。冬にはクローディアは仲間であると信じていた混血黒人から差別を実感し，ピコーラは父に強姦され，黒人を nigger と colored に差別し階層化する裕福な混血黒人から侮辱を受けた。春は草花が萌え希望に満ちた季節ではない。ソウプヘッド・チャーチが老犬を殺してピコーラに青い眼を授け，彼女を狂気の揺りかごの中に押し込んだ季節である。「『青い眼が欲しい』の自然のサイクルは生から再生ではなく死から死へと移り変る。」[7]青い眼を得たピコーラに一見癒しがあるようにも見えるが，彼女の自我は炸裂し，彼女は狂気の中で生きながら死んでいる。一方，幼い頃から所与の言語を懐疑し感覚的な満足を求め続け，ピコーラ・ブリードラブとこの世に生を受けなかった彼女の赤ん坊の鎮魂のために一家の物語りを語ろうとした語り手クローデ

ィアは，過去を回想して語ることで黒人としての自分のアイデンティティと自分自身の声・言葉を獲得した。さらに黒人コミュニティの真実にも到達できた。トマス・ピンチョンの *V.*の登場人物が言うように「詩とは天使や無意識との交感ではなく，内臓や生殖器や五感との交感である。」[8]したがって詩の言葉とは，ロゴスの言語ではなく内臓や生殖器や五感に達することのできる音楽の言葉である。クローディアはこの言葉を自分のものとしたのだ。

『青い眼が欲しい』は黒人がさまざまな黒人の差異の中で個としてのアイデンティティを獲得するために，どんな生き残りの戦術を体得しなければならないかを示している。それを示すためには無垢な少女時代を回想する，感受性の強い一人称語りが重要な要素である。そしてセンセーショナルなだけとなる恐れのある，ピコーラの自分の父による強姦事件[パランプセストの一枚の絵] の背後に潜み，それよりはるかにやっかいな問題である黒人の個とコミュニティについての真実に語り手が到達できたことを描く [パランプセストのもう一枚の絵] というモリソンの文学的かつ社会的意図は，子供の頃から感覚的に鋭く，視覚的なディスコースで物事を認識し，自分の言葉を模索するクローディアの語りの方法により，効果的に実現されているのだ。

Notes

1. 大社淑子・訳『青い眼が欲しい』(早川書房，1994) p. 241。Toni Morrison, *The Bluest Eye* のテキストは Charles Clerc and Louis Leiter eds., *Seven Contemporary Short Novels* (Glenview: Scott, Foresman and Company, 1982) pp. 295-425 を使用した。引用は本文中の括弧内に示す。大社淑子・訳を参考にさせていただいた。
2. Tom LeClair and Larry McCaffery eds., *Anything Can Happen: Interviews with Contemporary American Novelists* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1983) 258.
3. 例えば Melissa Walker, *Down from the Mountaintop: Black Women's Novels in the Wake of the Civil Rights Movement, 1966-1989* (New Haven: Yale Univ. Press, 1991) ではピコーラを主人公 (P. 48) とみなし，クローディアの語りを小説を語る声のひとつ (p. 51) と考えている。クローディアの生活や人生についてはほとんど語られていないから (p. 55) というのだが，彼女がピコーラの事件以上のことを認識できたという点から，彼女が主人公であると考える。
4. *Down from the Mountaintop*, 51.
5. *Down from the Mountaintop*, 55.
6. Wendy Harding and Jacky Martin, *A World of Difference: An Inter-Cultural Study of Toni Morrison's Novels* (Westport: Greenwood Press, 1994) 173.
7. Elizabeth T. Hayes ed., *Images of Persephone: Feminist Readings in Western Literature* (Gainesville: Univ. Press of Florida, 1994) 175.
8. Thomas Pynchon, *V.* (1961; New York: Bantam Books, 1979) 297.